

よえもん

※「よえもん」とは、中江藤樹へ親しみを込めて呼ぶ通称のことです。

論語から学ぼう

(記念館玄関横案内板に掲示中です)



≪ 第82号 ≫ (2022年12月発行)

令和4年度後期企画展 「中江藤樹と脩身堂」より

シリーズ
よえもん



「論語」郷党第十之二十二

車のぼにのぼりては、必ず正しく
立ちてすい緩とを執る。車の中にして
内顧ないこせず、疾言しつげんせず、親指しんしせず。

中江藤樹先生が40歳になった頃、先生の学問もいよいよ深まり、門人も多くなってきたので、講義や集会のための新しく本格的な書院を建てることになりました。慶安元年(1648)2月に「藤樹書院」が完成し、新しい教育の場ができあがりました。藤樹先生は、門人の教育や著作を進め、おだやかな生活が続いていたのですが、その年の8月25日に持病のぜん息が重くなり41歳で亡くなりました。

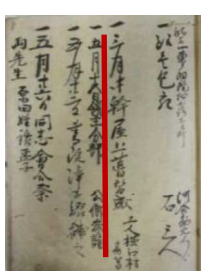
藤樹先生が亡くなり悲しみにくれる村人に、追い打ちをかけるように大溝藩のお殿様、分部嘉治より藤樹書院を閉鎖する指示がありました。門人たちは藤樹書院で3年の喪を勤めることを申し合わせていましたが、退散を命じられ、やむを得ず諸国に退散することになり、残された藤樹書院は、村人や多くの藤樹先生を慕う人々により維持されました。

藤樹先生の死後、学問の場所ではなく、藤樹先生を参拝する祠堂(位牌を祀る所)となっていた藤樹書院に、享保18年(1733)5月、大溝藩の5代目藩主・分部光忠が、お殿様としてはじめて「藤樹書院」に参拝し、この頃書院での講義や集会が再び行われるようになりました。

孔子は車に乗る時の行儀作法として、必ず背筋をのぼして手綱をにぎり、車に乗り込みました。また、車の中では後ろを振り向いたり、大声を出したり、道路の周辺にいる人々を指さしたりしませんでした。

孔子が活躍した頃、車に乗ることができるのは、高い地位や立場の限られた人達でした。孔子は車に乗る者として、ふさわしい乗り方の作法や、周辺の人々への心配りに気をつけていました。

近年、さまざまな交通事故が起きています。私たちも交通ルールやマナーに心がけて、安全に気持ちよく、車やバス、電車などを利用したいものですね。



藤樹書院の日記より 分部光忠参拝の記録

編集後記 新着情報 etc

11月8日(火)から4日間の日程で、高島学園第8学年(中学校2年生)のお二人の女子生徒さんが職場体験(県教委事業中学生チャレンジウィーク)で当館に勤務されました。本事業は、将来、生徒さんが社会人・職業人として自立していく力を身につけることができるよう地域(事業所)、学校、家庭が互いの連携、協力のもと推進している取組の一つです。少々緊張気味の生徒さんでしたので、初日、職員で協力しながら温かい職場の雰囲気づくりを心がけ、リラックスした空気感の元、職場体験に取り組んでいただきました。お客様をお迎えする館内の朝清掃、講義室の整理、陽明園・駐車場の落葉拾い、来館者への説明用資料の作成・整理、館内庶務業務、施設宮繕業務等々、終始真摯な態度でしっかり取り組んでくださいました。生徒さんが一生懸命勤務くださると、職員もがんばらなければなりません。いつにもまして仕事に身が入るものです。そして職員も本当に学ばせていただけました。仕事でも何でも「気持ち」や「心」の持ちようで大きく成果が違ってくることを、今回来ていただいたお二人は、きっと将来、立派な社会人になって、世のため、人のために力になってくださることでしょ。